

ヨハネの黙示録 4 章 1-11 節 「天の礼拝」

パトモス島にいた著者ヨハネは、「ある主の日のこと、わたしは霊に満たされていたが、後ろの方でラツパのように響く大声を聞いた。」のです。ヨハネにご自身を現わされた方こそ、栄光に輝く神の御子イエス・キリストでありました。イエス・キリストの啓示を受けて、アジア州にある七つの教会宛てに書き送った手紙が、1～3 章の内容です。そして今日の 4 章は、この復活のイエスがおられる天上界の有様です。4 章 5 章では、天における礼拝について書かれています。

ヨハネはラツパが響くように語りかける声を聞きました。「あの最初の声」とは、キリストの声です。今までヨハネは天からの光を受けて、地上で語っていたのですが、「ここに上って来なさい」という声を聞き、天の門に近づくことが許されました。そしてそこでヨハネ自身が神の玉座を見ながら語っているのです。ヨハネは、幻で神の姿を見たのです。そのお方の高貴で輝くような有様を、碧玉や赤めのうというような宝石に譬えて表現しています。そして玉座の周りには、エメラルドのような虹、七つのともしびが燃え、稲妻などがほとばしるように出ていました。さらに、この玉座の中央とその周りには四つの生き物がいたとあります(6 節)。さらに玉座を囲むように二十四の座があって、それらの座の上には白い衣を着て頭に金の冠をかぶった二十四の長老が座っていました(4 節)。

黙示録を読んでいると、よく意味が分からず、読みにくい書物だと思ってしまいます。多くの神学者たちが、その意味を解釈してきましたが、実際、まだよくわかっていないということが事実です。幻の意味について気を取られすぎるよりも、大事なのは、この四つの生き物と二十四人の長老たちが何をしているかということではないでしょうか。ここでは、四つの生き物も二十四人の長老たちも共に神を賛美し、礼拝しているのです。四つの生き物は昼も夜も絶え間なく神を賛美しています。玉座に座っておられ、世々限りなく生きておられるお方に、栄光と誉をたたえて感謝をささげ続けているのです。このように本来、主なる神を褒めたたえることが私たちの信仰なのです。天においては、二十四時間いつでもこの賛美が続いています。でも私たちは、生きるのが苦しく辛い時、天からの賛美が聞こえないときもあります。それでも、「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな、全能者である神、主、かつておられ、今おられ、やがて来られる方。(8 節)」と、天においては昼も夜も絶え間なく礼拝が行われているということです。

四つの生き物が栄光と誉れをたたえて感謝をささげると、二十四人の長老は玉座についておられるお方の前にひれ伏して、自分たちの冠を玉座の前に投げ出して言います。二十四人の長老たちは自分たちの冠を玉座の前に投げ出しました。誰でも褒められることは嬉しいことです。しかし褒められると、つい得意になって自信過剰になってしまいます。大事なのは、自分に与えられた栄誉を自分の物にするのではなく、その賜物をお与えくださ

った神を褒めたたえることなのです。長老たちが自分たちの冠を玉座の前に投げ出したのはそういうことでした。私たちが持っているものはすべて神が与えてくださったもので、自分の物ではありません。ですから神に誉をお返しし、神を褒めたたえるのです。私たちはこの地上において、主なる神を賛美し礼拝するのです。それが私たちの信仰であり、生きる拠り所です。

今、私たちは主の日の礼拝に集まっています。礼拝は、私たちが天上の礼拝を思い、「ここに上がって来なさい」と呼んでおられるお方のもとに招かれているということです。私たちは「ここに上がってきなさい」というイエスの執り成しによって、救いの門に導かれているのです。私たちの礼拝は天の礼拝につながっていて、私たちが歌う賛美は天における賛美に合わさっているのです。天においては昼も夜も絶え間なく賛美が歌われ、礼拝がさげられているのです。日々襲ってくる災いや困難の中で、心と天を仰ぐとそこで礼拝がなされているのです。それは暗闇に一筋の光を見る思いです。心の耳で天上から賛美の声を聞き、私たちも心から主を賛美したいと願っております。